日本新文典　上卷

375.9
Fu10
資料室

42585
教科書文庫
4
815
51-1921
20000
30736

資料室
375.9
Fu10

文部省檢定濟
大正十年十二月二十日　師範・中學校國語科教科書

文學博士　藤村作
文學士　島津久基　共著

日本新文典

東京　至文堂

広島大学
教
30336
図書

凡例（學生諸君へ）

一　文を正しく理解し、又正しく書くことの出來る爲には、文法上の知識が必要である。そしてそれに習熟することが一層大切である。

一　本書は成るべく煩瑣な理論や説明を避けて、極めて一般的な文法上の知識を授け、且諸君が教へられるよりは學んで自得することの出來るやうな行き方を採つた。なほ英文法との連絡、文語と口語との對照に留意して、便宜と興味とを併せて効果を多からしめようと試みた。

一　規則は或程度まで記憶を必要とする。挿入してあるカードはその爲につとめて有効に利用せられねばならぬ。

一　理論よりも實際である。練習に重きを置いて問題を出來るだけ豐富にした。そしてその問題も成るべく文法の爲の文法の練習に終らないやうなものを掲げてみた。

一　既得の知識は絶えず繰返して應用試練せねばならぬ。復習の項を設けてあるのは、幾分なりともその機會を多くしようとの用意からである。

日本新文典　上卷

目次

總說

第一章　文……一
練習　一……四
同　二……六
同　三……六

第二章　品詞……六
練習　四……一三
同　五……一四
同　六……一四
同　七……一五

同……一五
八……一五
第三章　品詞の轉成……一六
練習　九……一九
同　一〇……二〇
同　一一……二二
同　一二……二二
第四章　複合語……二三
練習　一三……二五
同　一四……二六
同　一五……二七
同　一六……二七
同　一七……二八
同　一八……二八
同　一九……二九
復習　一

練習　二〇……二九
品詞（上）
第五章　用言の活用……三一
練習　二一……三六
同　二二……三六
同　二三……三六
同　二四……三七
第六章　動詞の活用形……三八
練習　二五……四五
同　二六……四六
同　二七……四七
第七章　動詞の活用の種類（一）……四八
練習　二八……五〇
同　二九……五〇

練習　三〇……五一
同　三一……五一
同　三二……五五
同　三三……五五
同　三四……五五
同　三五……五八
同　三六……五八
同　三七……五九
同　三八……六二
同　三九……六三
同　四〇……六四
同　四一……六六
同　四二……六六
同　四三……六七
同　四四……七八

練習　四五……六八
同　四六……七三
同　四七……七三
同　四八……七四

第八章　動詞の活用の種類（二）……七五

練習　四九……七六
同　五〇……七七
同　五一……七九
同　五二……八〇
同　五三……八二
同　五四……八三
同　五五……八七
同　五六……八七
同　五七……八七
同　五八……八七

練習　五九……八八
第九章　形容動詞……八九
練習　六〇……九二
同　六一……九二
同　六二……九三
同　六三……九六
同　六四……九六
同　六五……九七
復習　二
練習　六六……九七
同　六七……九七
同　六八……九八
同　六九……九八
同　七〇……九九
同　七一……一〇〇

復習　三
練習　七二……一〇一
同　七三……一〇二
第一〇章　形容詞の活用及び活用形……一〇三
練習　七四……一〇六
同　七五……一〇六
同　七六……一〇六
同　七七……一〇七
同　七八……一〇七
同　七九……一〇七
同　八〇……一〇九
同　八一……一〇九
同　八二……一一〇
同　八三……一一〇
同　八四……一一一

第一一章　音便……一一二
練習　八五……一一三
同　八六……一一四
同　八七……一一五
同　八八……一一五
同　八九……一一七
同　九〇……一一八
同　九一……一一九
同　九二……一一〇
同　九三……一一一
同　九四……一一二
同　九五……一一二
復習　四
練習　九六……一二四
同　九七……一二五

附錄　文法上許容ニ關スル事項

上卷目次終

日本新文典 上卷

文學博士 藤村作
文學士 島津久基 共著

總說

第一章 文

【一】我々が何か一つのまとまつた考へを述べようとする場合は、

花が　咲く。

この繪は　美しい。

加藤清正は　豐臣秀吉の臣である。

などのやうに、必ず

何が　どう〳〵　だ。

といふ言ひ方をする。

今日の代數の試驗は、此の前のよりずつとやさしかつたよ。

可愛らしい白い小犬が、樂しさうに庭の芝生の上を驅け廻つてゐる。

といふやうな長い例でも、

君は　動物園に行つたか。

といふ問の場合でも、やはり「何が　どう〳〵　だ」といふ形である。又口語でなくて、

文

主部

述部

花　咲く。

加藤清正は　豐臣秀吉の臣なり。

父の恩は　山より高し。

のやうに文語でもさうである。

この「何が　どう〳〵　だ」と言ふ形の言ひあらはしが、もう一つの立派な文なのである。つまり、何でもよいから一つのまとまつた考へを言ひあらはすと、それが卽ち**文**になるのである。そしてその「何が」といふ部分は、言ひあらはさうとする事柄の主題になる部分であるから、**主部**と名づけ、「どう〳〵　だ」といふ部分は、主題に結びついて、そのはたらき動作・ありさま（狀態）などを述べる部分であるから**述部**と名づける。すると、文は主部と述部との二つの成分から出來て

あることがわかる。

文＝主部＋述部

練習一　左の文を主部と述部とに分て。

一　吾が輩は猫である。

二　大垣の柿羊羹は旨し。

三　あの鶏鶏はよく人眞似をするかね。

四　木がくれに鳴いてゐる小鳥の聲も何となく淋しい。

五　汽車がバッ〳〵と煙を吐きながら進んで來る。

六　今まで鏡の如くなりし海面見る〳〵怒濤の山と化しぬ。

【二】　文の正しい形は、必ず主部と述部とから成立つべきものであるが、省かれても意味の明らかな場合は、どちらかが全部或は一部省かれることがある。

（これは）變だね。

僕はこれから文展に行くんだ。君も（これから文展に行くの）か。

のやうなのがその例である。特に我が國語では、主部の省かれてゐる文が珍しくない。英語ならば、

Have you a pen? Yes, I have a pen.

と、必ず、you なり I なり主部がなくてはならぬ文でも、

（君は）ペンを持つてるか。（僕は）（ペンを）持つてる。

と、主部を言はなくても誤でないばかりでなく却つてそれが普通である。このやうに、國語の文には、主部が缺けてゐるのが多いことに注意せねばならぬ。しかしこれは決して主部が無いのではなくて、省かれてゐるのだといふこと

も忘れてはならぬ。

練習二　文の二大成分とは何か。例に就いて説明せよ。

練習三　左の文は、何れの成分が省かれてゐるかを述べよ。

一　奇なる哉。

二　何をしてゐるんだ。

三　君は日光を見物したことがあるか。うむあるよ。

四　父も笑ひぬ。母も笑ひぬ。弟も妹も。

第二章　品詞

【三】　文は、その發表する思想の上では、主部と述部との二大部分に分れるが、其の各部はまたこれを組立ててゐる材料であるいろ〳〵な語に分たれる。その一つ一つを**單語**と名づける。

父の恩は　山より高し。

といふ文を例に取れば、主部は更に「父」「の」「恩」「は」といふ四つの單語に、又述部は「山」「より」「高し」といふ三つの單語に分つことが出來る。卽ち、文は單語の集りであるともいへる。但しただ單語の集つたばかりでは文を成さぬ。「父の恩」「山より」だけでは文ではないのである。主部と述部とが備らねば、いくら長く單語が連つても、文とはいへない。「父の恩」「山より」のやうなのは、單語が二つ以上結びついた**連語**だといふに過ぎない。

單語

連語

複合語

●數單語の合して更に一つの單語となつたものを複合語といふ。

父母　動物園　東京帝國大學　うち勝つ　心細し

【四】文の材料となる語は無數であるが、その種類は多くはない。性質・作用等の上から、國語は九つの種類にまとめることが出來る。

名詞

一　名詞　人、又は事物の名稱。（英文法の Noun に當る。）

清正は秀吉の臣なり。

父の恩は山より高し。

健康は財寶にまさる。

代名詞

二　代名詞　名詞の代に用ゐられる語。（英文法の Pronoun に當る。）

おまへは感心だ

體言

あの話はまづこれで中止にてしおかう。

かなたに聳ゆるは富士山か。

【注意】「吾人」「小生」「足下」「誰」「何」「いづれ」なども代名詞である。英文法で副詞として取扱はるゝ「そこ」「あちら」なども代名詞である。

●名詞・代名詞は、主に主部に用ゐられる語の種類である。總稱して體言といふ。

動詞

三　動詞　事物の動作・存在等をいふ語。（英文法の Verb に當る。）

犬が走る。

勳一等を授けられたり。

宮城は東京に在り。

形容詞

四　形容詞　體言の上又は下に附いて、主に事物の性質・

狀態をいふ語。（英文法のAdjectiveに當る。）

青い鳥。

風清く、涼しき夕。

父の恩は山より高し。

助動詞

五　助動詞　主に動詞若しくは他の助動詞の下について其の作用を助ける語。（體言の下につくのも稀にある。）（英文法ではVerbに屬せしめて、特に品詞としては立てない。）

花が咲いた。

雨なほ止まず。

特に從二位に叙せられたり。

清正は秀吉の臣なり。

【注意】「あり」は動詞で、「なり」「たり」は助動詞であることを記憶せよ。

用言

副詞

接續詞

助詞

●動詞・形容詞・助動詞は、主に述部に用ゐられる語の種類である。總稱して**用言**といふ。

六　副詞　動詞・形容詞又は他の副詞の意味を限定する語。（英文法のAdverbに當る。）

雨なほ止まず。

あの犬は大層早く走る。

七　接續詞　語又は文を接續する語。（英文法のConjunctionに當る。）

一隊又一隊。

飲み且食ふ。

よろしい。それでは申しませう。

八　助詞　他の品詞の下について、他語との關係、若し

テニヲハ

くはいろ〳〵な意味を示す語。**テニヲハ**ともいふ。

（英文法には無い。或ものはそのPrepositionに當る。）

父の恩は山より高し。

東京から大阪まで長距離飛行を試みて成功したかなたに聳ゆるが富士山か。

感動詞

九　感動詞　感動した時に發する聲。

（英文法のInterjectionに當る。）

あゝ悲しい哉。

おや御珍しい。

【注意】「嗚呼」「噫」など漢字で書いてあつても感動詞である。

「おい」「もし」「さあ」など透起の爲に用ゐられるのもある。

英文法ではyes, noは副詞だけれども、「はい」「いえ」なども感動詞である。

品詞

【五】　以上の名詞・代名詞・動詞・形容詞・助動詞・副詞・接續詞・助詞・感動詞の一つ一つを**品詞**と名づける。即ち國語は九品詞から成つてゐるのである。だからどんな文でも、主部と述部とに分けることが出來ると共に、又その一つ一つの單語は、必ず九品詞のどれかでなければならない。

【注意】一つの單語は必ず一つの品詞であるが、その爲に單語と品詞との意味を混同してはならぬ。單語といふのは語の構造上からつけた名で、品詞といふのは語の性質上の名である。だから、例へば「犬」といふ語は、單語であつて名詞であり、「走る」は、單語で動詞である。

練習四　國文法の品詞と英文法の品詞とを比べて、その互に特有なものを擧げよ。

練習五　左の文中から名詞及び代名詞を拔出せ。

一　吾が輩は猫である。

二　この門を守る大將は誰ぞ。

三　喫煙は健康に害あり。

四　その答案はこちらのテーブルの上に載せて置きなさい。

五　君はそれとこれとどつちが好きか。どれでも君の好きな方を上げよう。

六　落下傘（パラシュート）とは何ですか。

七　綱・公時・貞光・季武を賴光の四天王といふ。

練習六　左の文中から接續詞を拔出せ。

一　一日三回白湯或は水にて服用すべし。

二　南東の風、晴、但し驟雨。

三　求めよ。さらば與へられむ。

四　ですけれども、何だか心配でなりません。

五　故に我等は右の論に贊成す。

練習七　左の文中から感動詞を拔出せ。

一　やあ、久しぶりだね。

二　歸りなん、いざ。

三　いや、もう澤山だ。

練習八　次の表の適當な場所に、各の品詞の例を書入れよ。

品詞	例
名詞	― ― ―
代名詞	

動詞
形容詞
助動詞
副詞
接續詞
助詞
感動詞

第三章　品詞の轉成

【六】　前章に於て、國語は九品詞から成つてゐることを學んだ。しかし、同一の單語でもその用法によつて或品詞から轉じて他の品詞になる場合がある。既に便宜上前章に出した例もあるが、なほ本來のものと混同せぬやうに一般的に說明してみよう。

○轉成の名詞

校歌の合唱終りて一同萬歲を三唱したり。

終を全うすべし。

前の文の終りは動詞、後の文の終は名詞である。「光」・「氷」・「霞」・「申込」・「請負」なども皆動詞から轉じた名詞である。又、

白のズボン

のやうに形容詞からも轉成することがあり、

哀れを知るは武士の習。

のやうに感動詞から轉成するのもある。

○轉成の代名詞

彼は甚だ忠實な僕である。

僕は中學生である。

前の文の僕は名詞、後の文のは代名詞である。「君」「小生」「閣下」なども、もと名詞であつて代名詞に用ゐられる語である。

○轉成の副詞

今日の代數の試驗はやさしかつた。（名詞）

今日代數の試驗があるんだ。（副詞）

餘る程ある。（動詞）

餘り無理だ。（副詞）

風烈しく、波荒し。（形容詞）

風烈しく吹く。（副詞）

副詞には、本來のものの外、このやうに、名詞・動詞・形容詞などから轉じて成るものが多い。

○轉成の接續詞

それまでの間が大切だ。（名詞）

無事着京仕候間御安心被下度候。（接續詞）

いづれも正しい。（代名詞）

いづれまた明日。（接續詞）

父に從ひて松島に遊ぶ。（動詞）

諸君は國家の干城なり。從ひて諸君の任や重しといふべし。（接續詞）

それはなほ面白からう。（副詞）

なほ、改めて御相談致しませう。（接續詞）

練習九　先生といふ語が、(イ)名詞、(ロ)代名詞として用ゐられた各、の文を作れ。

練習一〇　左の文中一線を附した語の品詞を問ふ。

一　國亂れて忠臣出づ。

二　國の亂れを如何せん。

三　十二月三十一日は、終夜、運轉す。

四　戰捷のラッパが勇ましく鳴り響いた。

五　つまり、自分の不注意から起ることだ。

六　會するもの無慮數百名に及びたり。

七　名詞及び代名詞を體言といふ。

八　眞夜中に荒々しく表の戸を叩く者がある。

九　あはれ、我が友。

一〇　あはれを告ぐる遠寺の鐘。

【七】　なほ、これは轉成と見なくてもよいが、品詞を指摘する際に注意すべきことは、接續詞と助詞のことである。「そして」・「又」・「しかし」などが接續詞であることは言ふまでもないが、英語にでも譯すれば當然"and" "but"等となるべき「て」・「が」・「ど」などは、國文法では助詞に屬するのである。即ち、同じ接續の意味を表すにしても、獨立して意味を有するものが接續詞で、單獨には完全な意味を表せないものは助詞に屬してゐると心得ればよい。感動詞と感動の意味を表す助詞との區別も同樣である。つまり、助詞といふのは、形の上から名づけた名稱で、その中には、或は疑問・命令・接續又は感動などの意味を表すいろ〳〵なものが含まれてゐるといふことを知つておけばよい。所謂「テニヲハ」は國語に特有な品詞である。

練習一一　左の文中の―線ある語は接續詞か助詞か。

一　昔々、爺と婆があつたとさ。

二　正義が勝つた。さうして眞の平和が來た。

三　爾皇孫行いて治めよ。

四　よい計畫だが、しかし實行はむづかしからう。

五　行けども行けども水また水。

六　そんなら、おまへと驅けくらべ。

七　絶えず前路を警戒しつゝ進軍す。

八　折ふし北風烈しくして扇はくるり〳〵とまはりけり。

練習一二　左の文中の感動詞と感動の意味を表す助詞とを指摘せよ。

一　あな、あさましの世や。

二　忠なるかな、孝なるかな。

三　どつこい、さうはいかぬ。

四　あら嬉しや、喜ばしや。

五　元弘元年の頃かとよ。

六　賴もしの若者や。

七　かくて彼は終に逝けり、あゝ。

八　うむ、さうさ。

九　すは、火事よ。

一〇　碑の面に記して曰く「嗚呼忠臣楠子之墓」と。

第四章　複合語

【八】　一つ一つの單語が、一つ一つの品詞であることはい

ふまでもないが、數單語の結びついて出來た一つの複合語も、無論一つの品詞である。ただ一見二三語のやうに見えることがないではないから、迷はされぬやうにせねばならぬ。例へば、

人々〔＝人＋人〕　渡邊-の-綱　東京-帝國-大學

我々〔＝我＋我〕

物語る〔＝物＋語る〕　咲き-そむ

輕々し〔＝輕＋輕し〕

誠に〔＝誠＋に〕　決し-て　度-々

それから〔＝それ＋から〕　加之〔＝しか＋のみ＋ならず〕

なるべし〔＝なる＋べし〕

にて〔＝に＋て〕　と-して　を-して

いでや〔＝いで＋や〕　なる-ほど　やれ-〳〵

の如きは、或は同語、或は同品詞若しくは異品詞の重なつて出來た複合語であるが、いづれも一つ一つの品詞と見るべきである。

練習一三　右の例に擧げた諸語の品詞を示せ。

【九】　なほ、複合語の中には、

眞白　み空　お肴　おほ君　御飯　第一　を暗し

け高い　さ迷ふ　か弱い　た易く　うち眺む　かき曇る　さし控ふ　相成る

の例に見る「ま」「み」「お」「おほ」「御」「第」「を」「け」「さ」「か」「た」「うち」「かき」「さし」「相」のやうに、獨立した單語としては用ゐられぬが、

接頭語

諸品詞の頭に結びついて複合語を造るものを含んでゐることがある。これらの「ま」「み」等を**接頭語**と名づける。この中には、その品詞に、それぞれの意味を附加するものもあり、ただ調子を強める爲に用ゐられるのもある。

●接頭語は英文法のPrefix (recall の re, become の be 等)に當る。

練習一四　右の例に擧げた諸語の品詞を示せ。

【一〇】　又、

伯父御　我等　私ども　子供達　あなたがた　鳥

獸など　二つづつ　重み　輕げ　黑さ　春めく

迷惑がる　學者ぶる　男らしい　煙たし

の「こ」「ら」「ども」「たち」「がた」「など」「づつ」「み」「げ」「さ」「めく」「がる」「ぶる」「らしい」「たし」などは、同樣に諸品詞の尾について複合

接尾語

語を造るから、**接尾語**と名づける。これ等は、もとの品詞を複數にしたり、又はそれぞれの意味を添へて品詞の所屬を轉じたりするが、獨立してはやはり意味を成さない。

●接尾語は英文法のSuffix (useful の ful, kindly の ly 等)に當る。

練習一五　右の例に擧げた諸語の品詞を示せ。

【注意】接頭語と接頭語のついた語とを混同して考へてはならぬ。接尾語でも同樣である。

練習一六　接頭語の中には幾つも重なつて出來てゐる念入りのがある。

お-み-足

お-み-お-つけ

などがさうである。これらは丁寧に言ふ爲に、二つ

以上の接頭語を重ねて用ゐたのである。他に同じやうな面白い例はないか。

練習一七　接頭語と接尾語とを同時に有する複合語の例を考へて見よ。

練習一八　左の文中から、接頭語・接尾語を有する複合語を拾出して、その品詞を言へ。

一　かき消すやうに失せたとのこと。
二　か弱い手一つで育てあげたのでした。
三　大御心のかしこさよ。
四　その苦しさといつたら、とても御話にならぬ。
五　どこやらに淋しみありて、味ひ深き句といふべし。
六　再び彼に時めく春が來た。

練習一九　左の文中から接頭語及び接尾語を摘出せよ。

一　あれを御覽。
二　大人ぶる勿れ。學生らしくあれ。
三　一家打揃うて博覽會に參りました。
四　こざかしき奴原かな。
五　他人がましい事をおつしやりますな。
六　いかが取計らひませうか。
七　入學願書は來る三月十日迄に御差出しに相成度候。

復習一

練習二〇　左の文の—線の右に各の品詞を記せ。

一　源の義家は鎮守府將軍頼義の嫡男にして八幡太郎と稱す。

二　もし〳〵、龜よ龜さんよ。

三　それはそれとして何か珍しい話があるか。

四　よく勉め、よく遊べ。

品詞（上）

第五章　用言の活用

【一一】今ここに
花（が）咲く

といふ文がある。是を主部はそのまゝにしておいて、述部を同じ「咲く」といふ語を用ゐながら、いろ〳〵な形に書きかへてみることとする。

文語	口語
花咲く	花が咲く

花　咲く（べし・らむ）　花が　咲くでせう
花　咲（きたり・きぬ・けり）　花が　咲（きました・いた）
花　咲かず　花が　咲かぬ
花　咲けば　花が　咲けば
花　咲く時　花が　咲く時
花　咲かむ　花が　咲（かう・きませう）
花　咲かば　花が　咲（いたら・きましたら）
花　咲けど（も）　花が　咲（いたけれど（も）・きましたけれど（も））
花　咲きそむ　花が　咲きそめる
花　咲きて　花が　咲（いて・きまして）
花　咲（きたる・ける）なるべし　花が　咲（いた（の）であらう・きましたでせう）

花（よ）咲け　花（よ）　咲け

【一二】　かう書き並べて見ると、直に氣づくことは、

第一　「花」といふ名詞は形が變らぬのに對して「咲く」といふ動詞はいろ〳〵な形に變ることである。卽ち變らぬ形の名詞を同じ主部にして、その述部の動詞は、同じ語でありながら形がさまざまに變ることの出來ることを知るのである。なほよく考へると、これは、名詞と動詞との間の差ばかりではない。形の變らぬといふ方からいへば、代名詞も名詞と同樣であり、形の變る品詞には「水清く流る」「清き（い）水」「水（は）清（い）けれど」の樣に變る形容詞があり、「咲き（い）たらば」「咲きたり（咲いた）」「咲きたる（咲いた）時」のやうに變る助動詞もある。つまり、名詞及び代名

詞即ち體言は形が變らぬが、動詞形容詞及び助動詞即ち用言は形が變るのである。この用言の形が變ることを、はたらき、若しくは、**活用**といふ。

そこで、なほ正しく言へば體言といふのは、文の主部になる語で、活用せぬからの名であつて、名詞代名詞がそれであり、用言といふのは、文の述部になるもので、活用する語であるからの名であつて、動詞形容詞助動詞がそれである。

【一三】　次に、

第二　用言は活用するといつても、その活用する語が全く形を變へるのではなくて、形の變らぬ部分と變る部分とがあることを我々は發見する。即ち、文語の方でも口語の方でも、「咲(さ)」

語尾
語根

だけはそのまゝで、語の末尾の部分のみが、「く」とか「き」とかいふやうに變つて下の語に連るのである。この變化する部分を**語尾**といひ、變化せぬ部分を**語根**と名づける。

この語尾變化、これが、即ち用言の活用なのである。國語では、體言や他の品詞には、これが無い。

【注意】語尾とその下に連る他の品詞とを混同して考へてはならぬ。

【一四】　さて、語根は二音以上の場合でも、普通、假名を送らなくてもよいが、語尾は幾つかの除外例を別にすれば、すべて必ず假名を送らねばならぬ。故に

花が咲ました　花咲らむ

は誤であり、

花　咲けり

を「花咲きけり」と讀むのではないことは直わかる。若し假名を送らずに、

花　咲ぬ

と書いたら、

「さきぬ」であるか「さかぬ」であるかに迷ふこととなる。

【注意】「也」「候」「曰く」「或日」「非ず」「否ず」等には「り」「ふ」「は」「る」「ら」「ら」等を附せぬ慣例である。

練習二一　用言の活用とは何か。

練習二二　體言の中にはたらく語があるか。

練習二三　左の語を語根と語尾とに分て。

行く　尋ぬ　うち眺む　ころがる　いち早し

練習二四　左の文に誤あらば正せ。慣例あるものは慣例に隨つて改めよ。

一　近頃は毎日雨の降ぬ日は無い。

二　諸車置べからず。

三　御光來の折は電話で御知せ下さい。

四　東照公曰く「堪忍は無事長久の基」と。

五　昔、或る國に賢い王樣がありました。

六　時に范蠡無きにしも非らず。

七　明ましておめでたう。

八　謹しみて新春を賀し奉り候らふ。

九　バラ〳〵と栗の實が落て來ました。

一〇　昨日友人から「坊ちやん」を借て來ましたが、まだ讀ません。

未然形

第六章　動詞の活用形

【一五】　我等はすでに動詞は活用するものであることを知つた。又語根と語尾とがあつて、活用とはその語尾變化のことであることを學んだ。さて、その語尾の變化は、下に連る語がいろ〳〵異なるに隨つて起るのであることもわかるであらう。この下に連る語は無數であるが、結びつき方は、どの動詞にも六通りより多くはない。左に順次六つの形を述べよう。

一　花咲か（ば　む　ん）　花未だ咲かず

のやうに、咲かといふ形は、主に「ば」・「む」・「ん」・「ず」などに連つて動作の未だ成立たぬ意を示す形であるから、之を**未然形**と

將然形と呼ぶ人もある。

連用形

名づける。

【注意】　口語では「む」・「ん」の代りに「う」（或助動詞は「よう」）に連り、「ず」の代りに「ぬ」・「ない」に連る。だから、

今に咲こうよ　本を讀もう

などは誤である。

二　花咲きそむ　花咲きたり

のやうに、他の動詞や助動詞に連るには、主に咲きといふ形からである。用言に連る形であるから、**連用形**と名づける。（形容詞に續くのも無論此の形からである。）

●動詞が名詞に變るには、この形からそのまゝ轉成する。「氷」・「光」・「申込」など皆さうである。

●助詞「て」に連るのはこの形からである。

音便

●連用形から、「て」「たり」「た」に連る時、動詞によつて語尾が「い」「う」「ん」「つ」等に變ることがある。これを**音便**といふ。

咲きて――咲いて
言ひて――言うて
讀みて――讀んで
持ちて――持つて

口語には甚だ多く、却つて此の變つた方が普通な位である。例へば

咲いた　讀んだ

と言つて、

咲きた　讀みた

とは言はないのである。しかし、それはすべての動詞ではなく、又變るのも「て」「た」に連る時だけのことで、他の語例へば、「ます」でもつけると、

咲きます　讀みます

と元來の形(文語る連用形と同じ形)で連る。

即ち、この「い」や「ん」は、連用形の語尾の音が變つたものであるから、書く時に落してはならぬ。

音便のことはなほ後に詳しく述べる。

終止形

三　花咲く

のやうに、咲くといふ形は文を結び止める形であるから、**終止形**と名づける。

●この形が動詞の本體である。それで或動詞を擧げる時は、英文法では「to」のついたInfinitiveの形で示すが、國文法では、いつも終止形で示せばよい。

連體形

四　花咲く時　花咲く春

のやうに、この形は名詞・代名詞に連る形にもなる。體言に連るから**體連形**と名づける。

已然形（既然形と呼ぶ人もある。）

五　花咲けば　花咲けど

のやうに咲けといふ形は、「ば」・「ど」・「ども」等の助詞に連つて、動作の已に成立つた意を示す形であるから**已然形**と名づける。

●「咲かば」は未然形、「咲けば」は已然形、混同してはならぬ。但し口語では、

雨が降れば參りません。

右のやうに後者を已然の意味でなくて假定を表すに用ゐるのが普通である。

命令形

六　花（よ）咲け

のやうに、この形は、又命令の意味を表す形であるから、**命令形**と名づける。

●動詞の種類によつては、この形には助詞「よ」（口語では「よ」又は「ろ」など）の附くものがある。

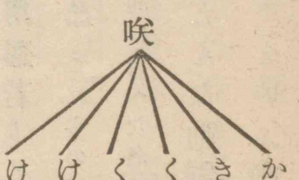
見よ　起きろ

活用形

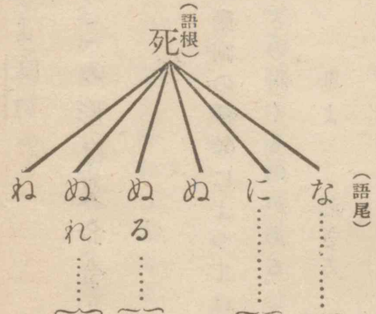
以上の、未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六つを動詞の**活用形**若しくは**語形**といふ。

【注意】これらの活用形の名稱は、その主なはたらきについて、便宜的に與へた名で、一定の標準によつて名づけたものではない。

【一六】　どんな動詞でも右の六つの語形を必ず持つてゐる卽ち「咲く」といふ動詞は



と活用する動詞なのである。又「死ぬ」といふ動詞の如きは



のやうに、六つの語形が悉く變つてゐるものであるが、他の多くの動詞は、一つの形で二つ以上を兼ねてゐる。例へば前に示した例でわかるやうに「咲く」は終止と連體とが同じ形、已然と命令とが同じ形である。

●「起く」「流る」のやうに、未然と連用と命令との三つが同じ形の動詞もあるが、それらは次々の章で詳しく説明する。

練習二五　左の文中の動詞の活用形を問ふ。

一　前へ進め。

二　では、此の本を買はう。

三　悔ゆれどもその甲斐なし

四　いたくあはれがりて養ひ取り給ひけり。

五　雨降らば降れ。風　吹かば吹け。

六　僕は此處に居る。

七　彼處に居る人は誰か。

八　武者小路實篤氏には「わしも知らないといふ脚本が有る。

九　盗人を捕へて見れば吾が子なり。

一〇　開いたと思つたら、やつとこさとつぼんだ。

一一　雀の子そこのけそこのけ御馬が通る。

一二　夕けぶり今日は今日のみ立てておけ明日の薪は明日とりて來む。

練習二六　左の文に誤あらば正せ。

一　雨降れば中止せん。

二　雨が降たら中止しませう。

三　「御面一本」「參た」。

四　明日晴天に候へば遠乘を試みたく、御誘引申し上げ候。

五　今夕は幸に在宿に候はば御來車待ち入り候。

六　もう書てしまひました。

七　行て參ります。

八　枝を折ろうとしたが手が屆かぬので止めた。

九　越そうにも舟は無し、叫ぼうにも聲が出ない。

一〇　人はよし笑へば笑へ。我はただ我が信ずる道を行かんのみ。

一一　死ねば諸共おくれはせじと、父子主從互に刺し違へてぞ失せにける。

練習二七　左の動詞の六つの活用形を示せ。

泣く　歌ふ　受持つ　打破る

第七章　動詞の活用の種類（一）

【一七】　すべての動詞は、その活用の上から文語では九種、口語では五種に分つことが出來る。

其の一　四段活用

「咲く」といふ動詞は

（語根）　未然　連用　終止　連體　已然　命令

咲　か　き　く　く　け　け

と活用する動詞であることは、已に學んだ。其の他

押　さ　し　す　す　せ　せ

待　た　ち　つ　つ　て　て

笑　は　ひ　ふ　ふ　へ　へ

でも、同じく

ア　イ　ウ　ウ　エ　エ

といふ音に活用する。この種の動詞は、終止と連體とが同じく、已然と命令とが同じ形であるから、異なつた形は

か　き　く　け

さ　し　す　せ

のやうに四つになつて仕舞ふ。然もその四つは、必ず五十音圖の上から四段（ア段イ段ウ段エ段）に當るので、**四段活用**の動詞と名づける。又すべての動詞の活用は必ず五十音圖の或行の外には出ない。卽ち「咲く」は加行の四段に活用するから加行四段活用の動詞といひ「押す」は同樣に佐行四段活用の動詞といふ。

●四段活用は口語も文語も同じである。ただ口語では連用形が音便で「い」や「う」等になることが多い。

【注意】四段活用は文語も口語も同じであるから、口語の未然形も、やはりア段でなければならぬことを特に注意するがよい。（第六章（一五）二（注意）参照）

練習二八　左の四段活用の動詞を活用させよ。

（語根）未然　連用　終止　連體　已然　命令

置

貸

打

練習二九　右の例に倣うて次の四段活用の動詞をはたらかせよ。

動く　驚く　うち驚く　書く　聞く　騒ぐ　消す　申す

持つ　討つ　行ふ　失ふ　見失ふ　云ふ　言ふ　添ふ

附添ふ　給ふ　慕ふ　乞ふ　養ふ　飛ぶ　呼ぶ　浮ぶ

飲む　讀む　惜む　成る　賣る　怒る　語る　物語る

送る　歸る　受取る

○印を附した語は特に練習して記憶せよ。

練習三〇　左の口語動詞の活用を記せ。

動く　消す　持つ　行ふ　飲む　歸る　行く　試す

遊ぶ　祝ふ　思ふ　拾ふ　憎む　鳴る　始まる　終る

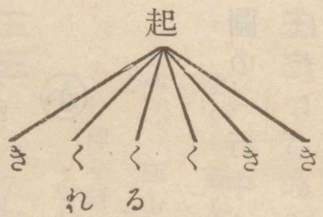
ぶんなぐる　うつちやる

練習三一　左の文中、動詞の活用及び假名遣の誤つてゐるものを訂正し、且その理由を述べよ。

一　言うは易く行をは難し。
二　壯嚴といわうか雄大といをーか。
三　ぢやそのまゝにしておこう。
四　酷暑の砌に御座候ゐば御自愛奉祈候。
五　彼の厭世といい、樂天といふも、畢竟その人の境遇が授けたる人生觀のみ。
六　僕が行こふと思もう時に限つていつも雨だ。
七　シャツ・ズボン・工場服御つくろい致します。
八　暗中に熊笹がざわ〳〵とふるい動ごく。
九　荷田春滿・賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤を國學の四大人とゆー。
一〇　兄は昨夜神戸から歸へりました。

其の二　上二段活用

【一八】「起く」といふ動詞をとつて見ると、



弟は未だ起きず。
余は六時に起きたり。
余は毎朝六時に起く。
余の起くる頃隣人も起く。
余起くれば弟も起く。
早く起きよ。

の例によつてもわかるやうに

(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
起	き	き	く	くる	くれ	き

と活用することを知る。其の他

落	ち	ち	つ	つる	つれ	ち

報　い　い　ゆ　ゆる　ゆれ　い

でも

イ　イ　ウ　ウル　ウレ　イ

の音に活用して、未然と連用と命令とは同形であり、且連體に「る」、已然に「れ」が添はるのである。そしてこれは、

ア段　イ段　ウ段　エ段　オ段

か　き↓く　け　こ

←くる

←くれ

と五十音圖の一行中イ段とウ段との二段即ち中央より上の二段にはたらくから、**上二段活用**と名づける。「起く」は卽ち加行上二段活用の動詞である。

上二段活用

●命令形には必ず「よ」を添へる。

練習三二　左の上二段活用の動詞を活用させよ。

生く　盡く　朽つ　恥づ　攀づ　閉づ　強ふ　忍ぶ（四段にも）

（はたらく）延ぶ　亡ぶ　試む　恨む（四段にも活用させてよい）　老ゆ　悔ゆ

○印を附した語は特に練習して記憶せよ。

練習三三　左の動詞が何活用に屬するかを言へ。二樣にはたらくものはその旨を答へよ。

過つ　過ぐ　忍ぶ　結ぶ　綻ぶ　下す　下る（くだる）　降る（くだる）　降（ふ）

練習三四　左の文中に誤あらば正せ。

一、糧食盡く時これ城中の將子悉く亡ばん日なり。

二　己の長を誇る勿れ。己の短を恥ず勿れ。

三　その慘狀見るに忍ばず。

四　落ちる涙に袖を濡しぬ。

五　人はパンのみにて生くものにあらず。

六　老いては子に從う。

七　一度試む時は直に神効を奏す。

八　峯高くして攀じ難し。

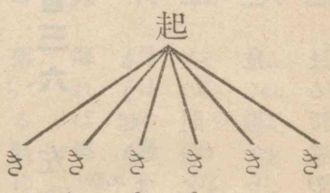
九　侮らば悔いることあるべし。

一〇　過ぎる月日は矢の如し。

【一九】　口語では終止と連體とが同形で、且

イ　イ　イル　イル　イレ　イ

の音に活用する。「起きる」ならば



弟は未だ起きない。

僕は六時に起きた。

僕は毎朝六時に起きる。

僕の起きる頃隣人も起きる。

僕が起きれば弟も起きる。

早く起きろ。

ある。で、文語との違ひは

	未然	連用	終止	連體	已然	命令
（語根）						
（文語） 起	き	き	く	くる	くれ	き
（口語） 起	き	き	きる	きる	きれ	き

止・連體・已然の三つだけである。

●なほ未然形からは「む」「ん」の代に「よう」に連る。（四段活用では前

に述べたやうに「う」であるが）

【注意】故に右の場合には「やう」と書かぬやうに注意するがよい。

「やう」は「如し」「樣」の意味のときに用ゐる。

●命令形には「よ」もしくは「ろ」或時には「な」を添へる。（文語で命令形に「よ」を添へるものは口語では大抵「よ」か「ろ」か「な」かをとるものと思へばよい。以下特に記さぬ。）

練習三五　練習三二の動動の口語活用を記せ。

練習三六　左の文中の誤れる方の假名を消せ。

一　もう起きやうぢやないか。

二　次の問題を試みやう。

三　危く馬から落ちやうとした。

四　まるで盆のやうなお月樣。

五　恩を仇で報いやうとは。

六　これで少しは懲りやう。

七　そのやうな事を强ひる事は出來ない。

八　月日の過ぎ去るのは矢のやうだ。

九　悔れば悔いることがある。

一〇　落つる涙に袖をぬらした。

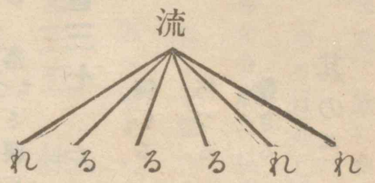
練習三七　左の動詞の活用形を問ふ。

悔いる	悔ゆる	試むる	試みる	生きる
朽つる	老ゆる	報いる	强ふる	强ひる
盡きる	懲りる			

其の三　下二段活用

【二〇】次に「流る」といふ動詞はどうかといふと、前の二種

とは又違つて



水流れず。
水流れ去る。
水矢の如く流る。
矢の如く流るゝ水。
水は流るれど。
流れよ、笹舟。

のやうに

	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(語根) 流	れ	れ	る	るる	るれ	れ

と活用する。其の他

受	け	け	く	くる	くれ	け

以下《　》内に入れてある語は「得」と同じく語根と語尾とを分つことのできぬ語である。

《得》　え　え　う　うる　うれ　え

でも

	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エ

の音に活用する。未然と連用と命令との三つは同形で、且連體に「る」、已然に「れ」の添ふことは上二段活用と全く同じである。ただ異なるのは

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
	ら	り	る	れ	ろ
			る	る	
			る	れ	

と、同じ二段ながら、五十音圖中のエ段とウ段卽ち中央から下の二段にはたらく點にある。よつて之を**下二段活用**と

名づける。「流る」は卽ち良行下二段活用の動詞である。

●これも命令形には必ず「よ」を添へる。

練習三八　の左下二段活用の動詞を活用させよ。

授く　妨ぐ　助く　投ぐ　設く　告ぐ　載す　馳す
仰す　寄す　任す　出づ　企つ　棄つ　打棄つ　詣づ
隔つ　兼ぬ　重ぬ　寢ぬ　與ふ　衰ふ　訴ふ　換ふ
取換ふ　數ふ　考ふ　叶ふ　答ふ　貯ふ　調ぶ　堪ふ
湛ふ　仕ふ　傳ふ　捕ふ　迎ふ　交ふ　終ふ　唱ふ
改む　誡む　諫む　定む　認む　留む　始む　求む　消ゆ
聞ゆ　見ゆ　榮ゆ　越ゆ　聳ゆ　絕ゆ　殖ゆ　凍ゆ
燃ゆ　覺ゆ　吠ゆ　生まる　恐る　溺る　崩る　倒る
離る　亂る　敗る　別る　忘る　飢う　植う　据う

○印を附した語は特に練習して記憶せよ。

練習三九　左の文中に誤あらば正せ。

一　教ゆるは學ぶの半ばなり。
二　正成路次に出で迎ひ奉る。
三　出で迎ふ人數を知らず。
四　先を爭ひて馳せ向ふ若武者二騎あり。
五　空はかき曇りて星影一つだに見へず。
六　誰一人詣でる者も無き淋しさ。
七　恐しき事を企ちたるものかな。
八　相傳ふ頼信十三世の孫なりと。
九　馬に乘りて馳す人あり。
一〇　榮ふる大御代祝へや祝へ。

一一　父は小松殿に仕えて待賢門の戰にも御供申しき。

一二　式終りて一同校庭の南隅に記念樹を植ゆ。

一三　結局軍法會議に附すこととはなりぬ。

一四　崩る崖、倒る家、逃げ惑ふ人々の泣き叫ぶ聲、友はそも如何にかせし。

練習四〇　左の文中〇印の箇處に適當の假名を埋めよ。

一　與〇るは受くるよりも幸なり。

二　指折り數〇れば已に早七年の昔となりぬ。

三　飢〇たる者は食を擇ばず。

四　堪〇難き苦痛を物ともせずして司令部さして急ぎぬ。

五　終に眠るが如く息絶〇ぬ。

六　殆ど訪問の客斷〇る時なし。

七　應〇るものはただ山彦の聲のみなりき。

八　危難の已に身に迫れるを覺〇。

九　衰〇たりとも不敵の猛將、容易くは生捕らるまじ。

一〇　何故に訴〇出でざりしぞと問〇給〇ど、なほ娘を前に据〇たるまゝ一言もえ答〇奉らざりけり。

【二一】　口語では、これも終止と連體とが同形で、

	エ	エ	エル	エル	エレ	エ	

の音に活用する。「流れる」の活用を文語と比べると、

	(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(文語)	流	れ	れ	る	る	れ	れ
(口語)	流	れ	れ	れる	れる	れれ	れ

で、上二段活用に於けると同じく、三つの活用形だけが違ふ。

●未然形から「よう」に連ることも上二段活用の場合と同樣である。

●「出づ」・「寢ぬ」は、口語では「出る」・「寢る」となつて、語根と語尾との區別がない。

練習四一　練習三八の動詞の口語活用を記せ。

練習四二　左の文中に誤あらば正せ。

一　困難に堪える習慣を養いたいものだ。

二　勝つも負けるも時の運だ。

三　音信はとうから斷へて了つてゐる。

四　その時家來達が皆で諫めやうとしました。

五　早川の流の音が盛んに窓ガラス越しに聞へて來る。

六　誰一人詣でる者も無い。

七　將軍は笑を湛へて從卒をかへりみた。

八　いろ〳〵の感想が交る〳〵私の胸に浮んでは消へて行く。

九　出やうとしてふと思い出した事がある。

一〇　よろしく御傳え下さい。

練習四三　左の文中の誤れる方の假名を消せ。

一　今日からすつかり改めやうと思ふ。

二　助けやうと思つても川向、ただ心がいらだつばかり。

三　これが私共の植ゑた樹です。

四　飢へやうが凍ゑやうがかまはぬ。

五　重ねやうがまづいね。

六　敵を侮ればきつと敗れる。

七　山が崩れやうとした。

八　山の崩れるやうな響がした。

九　訴へるやうに彼は叫んだ。

一〇　危難が已に身に迫つたのを覺ゆる。

一一　少しも恐るることはない。

一二　私も老ひた。然しこのまゝで朽ち果てやうとは思はぬ。

練習四四　左の動詞の活用形を問ふ

衰ふる　衰へる　榮える　榮ゆる　植ゑる　植うる
凍ゆる　凍える　飢うる　飢ゑる　諫める　聳ゆる

練習四五　文語に於ける上二段活用と下二段活用とは、四段活用と何處が違ふか。

其の四　上一段活用　下一段活用

【一一二】　「聞く」といふ動詞は四段活用であるが「見る」といふ動詞はさうでない。上二段或は下二段活用でもない。この動詞は次のやうに

（見）
- み　余未だ天狗といふものを見ず。
- み　天狗を見たる人ありや。
- みる　日の出を見る。
- みる　見る人山をなせり。
- みれ　よく〳〵見れば我が子なり。
- み　この繪を見よ。

と活用する。其の他

（著）　き　き　きる　きる　きれ　き
（射）　い　い　いる　いる　いれ　い

でも

イ　イル　イル　イレ　イ

の音にはたらく。（上二段活用動詞の口語の活用と全く同じである。）

【二三】　又「蹴る」といふ動詞は

（蹴）

け　いざ、鞠を蹴む。
け　雪を蹴散らして進む。
ける　この馬怒る時は人を蹴る。
ける　鞠を蹴る遊は昔もありき。
け　一蹴蹴ればボール高く天に飛ぶ。
れ　靴にて蹴よ。

のやうに

エ　エル　エル　エレ　エ

の音にはたらく。（下二段活用動詞の口語の活用と全く同じである。）だから兩方とも、未然・連用・命令が同形である上、終止と連體とに「る」が添うて又形が同じく、そして已然には「れ」が添うてゐる。

【二四】　兩方の相違點は

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
	ま	み	む	め	も
		← みる			
		みれ			
	か	き	く	け	こ
			← ける		
			けれ		

上一段活用
下一段活用

と同じ一段ながら、五十音圖中のイ段のみとエ段のみと、卽ち中央から上の一段のみと下の一段のみとにはたらくだけのことである。よつて前者の**上一段活用**、後者を**下一段活用**と名づける。「見る」は卽ち麻行上一段活用蹴るは卽ち加行下一段活用の動詞である。兩種共口語の活用も文語の活用と全く同じである。（但し「蹴る」は口語では四段活用に用ゐられることが多い。）すると、文語の上二段活用動詞の口語活用は卽ち上一段活用であり、文語の下二段活用動詞のそれは下一段活用なのである。卽ち口語動詞では二段活用といふものがないのである。

●兩種共命令形に必ず「よ」を添へる。

●兩種共口語で未然形から「よう」に連ることは、文語二段活用動詞の場合と同樣である。

●文語の下一段活用動詞は「蹴る」一語しかない。

●文語の上一段活用動詞は左の十三語であるから記憶せねばならぬ。

著る　似る　煮る　干る　見る　顧る　鑑る
惟る　射る　鑄る　居る（居るとは別の動詞を）　用ゐる（波行上二段にもはたらく）
率ゐる

【注意】「何々してゐる」の「ゐる」は和行上一段活用だから「いる」と書くのは誤である。

練習四六　右に擧げた上一段活用の動詞を活用させよ。

練習四七　左の文に誤あらば正せ。

一　早く煮れ。

二　いざ、鞠を蹴りて遊ばん。

三　親に似ぬけなげ者かな。

四　これこそ昔の名工が鑄りたる佛像なれ。

五　率ゆる大將はそも誰ぞ。

六　扇の的を射りて名を擧げし與一にも劣らぬ手柄ぞかし。

七　常に用ゆれば身體の疲勞を恢復し根氣を增す。

八　人を射らんと欲せば先づ馬を射れ。

九　我等後輩の大いに鑑むべきところ。

練習四八　左の文に誤あらば正せ。

一　今迄何處に遊んでいたのだ。

二　卵を煑やうとして時計を煑た學者もある。

三　いくら兄弟といつたつて、あれ程似ていやうとは思はなんだ。

四　「用ゐる」といふ動詞は「用ふ」と波行上二段活用にも用ゆる。

五　鞠を蹴ようぢやありませんか。

六　鞠を蹴らうぢやありませんか。

七　うむ、一つやつてみやう。

八　着物の着やうがわるいと、いつも御祖母樣から御小言を頂戴します。

九　「おれも射ろう。おまへも射ろ。」と射手の一人が熱心に彼に勸めている。

第八章　動詞の活用の種類（二）

【二五】　大概の動詞は以上述べた四段活用・上下二段活用・上下一段活用の五種のいづれかに屬するが、なほ其の他にとりのけ（除外例）の動詞が四種ある。之を變格活用の動詞

と名づける。

其の五　奈行變格活用

【二六】　第六章(一六)に擧げた「死ぬ」といふ動詞は前に述べたやうに

(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

と活用して、六つの悉く違つた活用形を具へ、四段活用のやうにも見え、二段活用のやうにも見える一種特別な活用を持つてゐる。そして奈行に限るので**奈行變格活用**と名づける。「死ぬ」(現代文では四段活用に用ゐてもよい)の他に此の種に屬するのは現代文には餘り用ゐられぬ「往(い)ぬ」だけである。

奈行變格活用

●口語では奈行變格活用は四段活用になつてゐる。

練習四九　左の動詞を活用させて比較せよ。

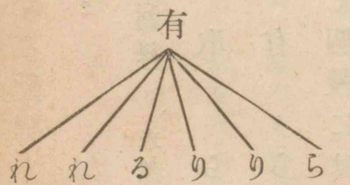
(文語奈行變格)　往

(文語奈行下二段)　寢

(口語奈行四段)　死

其の六　良行變格活用

【二七】　「有り」といふ動詞は



異議あらば言へ。
至急御來談ありたし。
我に一人の弟あり。
文事ある者は必ず武備あり。
勇あれども謀無し。
人には情あれ。

と活用する動詞で、頗る四段活用に似てゐるが、四段活用に比べると

	(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
取	ら	り	る	る	れ	れ	
有	ら	り	り	る	れ	れ	

と、同じく四段にはたらくが、終止形が一方はウ段であると一方はイ段であるとの違ひが氣づかれる　已然と命令とが同形である事は兩者共通であるが、四段活用では終止と連體とが同形であるのに、「有り」では連用と終止とが同形である。よつて「有り」のやうな活用を有する動詞の種類を**良行變格活用**と名づける。良行變格活用に屬する動詞は「有り」「在り」の外には「居り」(但し現代文では四段活用に用ゐてもよい)と、現代文には用

良行變格活用

ゐられぬ「侍り」とがある。なほ、形容動詞と稱するもの(後に説明する)は、形容詞若しくは副詞が「あり」と複合したものであるから、亦すべて良行變格活用に屬する。

●口語では良行變格活用は四段活用になつてゐる。

練習五〇　左の動詞の文語・口語兩活用を記せ。

在り　居(を)り　居(ゐ)る

練習五一　左の文中の—線ある語の品詞を問ふ。

一　棄つる神あれば功くる神あり。

二　奈良は七代七十五年間の帝都たり。

三　未だ冬の初なればさほど寒からず。

四　夢になれ、夢になれ。

五　願はくは君が一家の上に祝福あれ。

六　あれ〳〵あれを御覽なさい。

練習五二　左の口語文中○印の箇處に適當な文字を埋めよ。

一　棄○る神があれば助○る神もあ○。

二　何處に隱れて居○うも知れぬ。

三　あ○うことか、あるまいことか。主人の目を掠めて非道を働きながら、少しも恥○ぬとは呆れたものだ。

四　鶯がいい聲で囀つて○る。

五　一寸の蟲にも五分の魂はあ○う。

其の七　加行變格活用

【二八】　「來（きた）る」といふ動詞は良行四段活用であるが、同じ意味の「來（く）」といふ動詞はそれとは活用が違つて、

加行變格活用

君や來む、我や行かむ。
尋ね來て花に一日を暮しつ。
豆を撒けば鳩四方より群り來。
今は追ひ來る敵も無し。
花咲く春は來れど友は還らず。
來よや、人々。

（來）こ　き　く　くる　くれ　こ

の例でもわかるやうに

（語根）　未然　連用　終止　連體　已然　命令

（來）　こ　き　く　くる　くれ　こ

とはたらく。即ち未然と命令とが同形であるだけで、他は皆形が違ふ特殊のものであるから、之を**加行變格活用**と名づける。加行變格の動詞は「來」一つだけである。

●命令形には「よ」を添へる。但し口語では此の動詞に限つて「い」を添へる。

●口語では加行變格活用は終止形が連體形と同じく「くる」となる外、文語の活用と同じである。

●口語では未然形は「よう」に連る。

練習五三 左の―線の動詞は何活用に屬するものか。

一 早く來れ。

二 早く來ればよいのに。

三 早く來てくれればよいのに。

四 此の年元兵復來りて對馬を攻む。

五 ボチよ、來い〳〵。

六 立ち別れいなばの山の峯に生ふるまつとし聞かば今歸り來む。

練習五四 左の文の―線の語は如何に讀むべきか。

一 雁去り燕來る。

二 雁が去つて燕が來る。

三 我も〳〵と馳せ來る。

四 我も〳〵と馳せ來る勇士共。

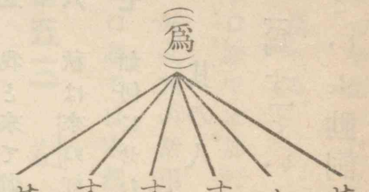
五 我と來て遊べや親の無い雀。

六 秋は來ぬ、紅葉は宿に散りしきぬ。

七 如何にせむ、來ぬ夜あまたの時鳥、待たじと思へば村雨の空。

其の八 佐行變格活用

【二九】 「爲す」といふ動詞は佐行四段活用であるが、同じ意味の「爲(す)」といふ動詞は、又それとは違つた活用で、



冷水浴をせば皮膚强壯とならむ。
我も旅行をしてみむ。
運動をもし勉强をもす。
運動をする人は身體强健なり。
冷水浴をすれば皮膚强壯となる。
早起をせよ。

のやうに

(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せ

と活用する。上二段と下二段とを兼ねたやうな一種特別な活用で、未然と命令とは同形であるが加行變格活用とも亦趣が異なつてゐる。よつて之を**佐行變格活用**と名づけ

佐行變格活用

る。佐行變格に屬する動詞は「爲」の他には、現代文には用ゐられぬ「おはす」がある。其の他國語の名詞及び漢語・洋語等が「す」と複合して動詞となつたもの、卽ち

罪-す
勉强-す　論-ず
スケツチ-す

の如きは、皆佐行變格活用をなし、又副詞が「す」と複合して動詞となつたもの、例へば

明らかに-す　正しく-す
全う-す　安ん-ず

のやうなのも同樣に佐行變格活用に屬する。

●命令形には「よ」を添へる。口語では「よ」(「い」をつける)(こともある)もしくは「ろ」を

添へる。

●口語では佐行變格活用は終止形が連體形と同じく「する」となる。

口語活用は語によつて一定せぬ。概して

せ　し　する　する　すれ　せ(よ)

又は

し　し　する　する　すれ　し(ろ)

と活用する。

●口語では未然形は「よう」に連る。

【注意】「何々しよう」といふのは佐行變格であるから、「せう」と書かぬ方がよい。「どうでせう」「ありませう」「行きませう」等の「でせう」「ませう」は助動詞で、「勉强しよう」「かけつこしよう」などの「しよう」とは違ふ。

練習五五　左の文語動詞を活用させよ。

おはす　存ず　譯す　噂す　散歩す　西洋化す

雲煙過眼視す　重んず　詳らかにす

練習五六　左の漢語が動詞となる時は如何に活用するか。

運動　競爭　一致　休息　批評　祝　愛　罰

信　略

練習五七　左の動詞の文語・口語兩活用を問ふ。

生まる　死ぬ　死す　殺す　生く　生む　生ず

練習五八　左の文中の動詞を指摘してその何活用の何形であるかを言へ。

一　善を爲さむとせば勇氣あれ。

二　ならぬ堪忍をせよ。

三　もう勘辨しろ。

四　爲る事爲す事皆鵶の嘴と喰ひ違ふ口惜しさ。

五　まあ、どうしませう。

六　どうすればよいのだ。

七　なせばなる、なさねばならぬ、なるものを、ならぬと云ふは、なさぬ故なり。

八　心こそ心迷はす心なれ、心に心、心ゆるすな。

練習五九　左の文に誤あらば正せ。

一　死のふか生きやうか、それが問題だ。

二　卑怯な死にやうをしてくれるな。

三　死ねば諸共おくれはせじと互に刺し違へてぞ失せにける。

四　僕は何とゆう不幸者であろう。

五　動かずにその儘にしてゐれ。

六　動かずにその儘にしてゐればよいのだ。

七　一寸行つてきよう。

八　隈なく探し求むれども、大塔宮は何處にもおはさず。

九　子を愛さぬ人はあらじ。

一〇　こゝらで一休みしやう。

一一　明日の會には皆出席せうぢやないか。

一二　さうでしようか。さうであろふと思います。

第九章　形容動詞

【三〇】「美しく」のやうに「く」に終る副詞(卽ち形容詞から轉

じたもの)、「明らかに」のやうに「に」終る副詞、及び「悠然と」のやうに「と」に終る副詞が良行變格活用動詞の「あり」と複合して「……かり」「……なり」「……たり」となつた語

美しかり……美しく＋あり
明らかなり……明らかに＋あり
悠然たり……悠然と＋あり

のやうなものは、之を**形容動詞**と名づけて動詞の一種と見做す。その活用は前に述べたやうに良行變格活用と同じである。

(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
美し	から	かり	かり	かる	かれ	かれ
明らか	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ

形容動詞

實際の語尾變化は、耳變と同じであるが、便宜上、下のやうに記載するがよい。

悠然　たら　たり　たり　たる　たれ　たれ

卽ち形容動詞には「かり」活用・「なり」活用・「たり」活用の三種類があるのである

●「かり」活用の終止形は現代文では用ゐられない。又已然形も殆ど用ゐられない。(「美しかれども」といふ場合には「美しければ」と形容詞「美しけれ」の用ゐられるのが普通である)

●形容動詞「異なり」を「異なれり」「異なりて」「異なりたり」と用ゐてもよい。

【注意】形容動詞の語尾の「なり」「たり」を

余は中學生なり
學生たる者の本分

のやうに用ゐられた體言の下につく助動詞の「なり」・「たり」と混同

してはならぬ。（第二章（四五）注意）參照）

練習六〇　左の形容動詞を活用させよ。

多かり　少かり　善かり　惡しかり　靜かなり
稀なり　勤勉なり　欣然たり　滔々たり

練習六一　左の文中形容動詞あらば拔出せ。

一　一座慨然たり。
二　威風堂々たり。
三　日露の役に第三軍司令官たり。
四　遠からん者は音にも聞け。近くば寄つて目にも見よ。
五　その巧なる事殆ど言語に絶す。
六　夢ならば早く覺めよ。
七　「我は八郎爲朝ぞ。正淸ならば引退け。」と雷の落ちかゝる如き聲してぞ呼ばはりける。
八　この邊は郊外なれば、極めて閑靜なり。
九　嚠喨たるラッパの音何處よりともなく響き渡りぬ。
一〇　大なる詩人は常にその時とその國との醫師なり。彼は吾等に生命を齎らせばなり。

【三一】　口語では形容動詞の「かり」活用は、未然（よからう）と連用（よかつた（よかり＋たり））だけ、（但し「よかれ、あしかれ」のやうに對語の場合にのみ命令形が用ゐられる）「なり」活用は未然（明らか（だ）ら（で）う）連用（明らか（だ）つ（で）た）終止（明らか（だ）（である））だけある。連體形はないから大抵「明らかな」のやうに文語の「なる」が「な」になつてゐる。

練習六二　左の文中に形容動詞あらば拔出せ。

一　遲かれ早かれわかる事だ。

二　結構な御話を伺ひました。

三　まあ綺麗だ。

四　斷乎たる處置に出なければならぬ。

五　それは面白からう。

六　湖の面は眠つてゐるやうに靜かである。

七　いつも寂しかつた私の家にも今日こそ春が來たのだ。

八　向ふから立派な八字髯の紳士がやつて來る。

九　誰だ、誰だ。戸を叩くのは。

一〇　うむ、そのことだけは確だよ。

【三二】以上述べたやうに、動詞には

文語	口語
四段活用	四段活用（文語の四段活用と活用同じ）
良行變格活用	
奈行變格活用	
上二段活用	上一段活用（文語の上一段活用と活用同じ）
上一段活用	
下二段活用	下一段活用（文語の下一段活用と活用同じ）
下一段活用	
加行變格活用	加行變格活用（文語と活用少し異なる）
佐行變格活用	佐行變格活用（文語と活用少し異なる）

文語は九種、口語は五種の活用の種類がある。變格の動詞

及び文語の下一段と上一段とは數が多くないから、すべて記憶するがよい。其の他の動詞は殘りの三種のいづれかであるから、「ず」を添へてみて、未然形が「ア段」ならば四段、「イ段」ならば上二段、「エ段」ならば下二段と思へばよい。

「讀ま(ア段)……ず」　四段活用
「閉ぢ(イ段)……ず」　上二段活用
「出で(エ段)……ず」　下二段活用

【注意】口語は二段活用がないから變格以外のものは、此の方法で四段か上一段或は下一段と思へばよい。

練習六三　命令形に「よ」を添へねばならぬ活用の種類を言へ。

練習六四　口語で未然形が「う」に連る活用と「よう」に連る活用とは何々か。

練習六五　良行變格活用と四段活用との異なる點を問ふ。

復習二

練習六六　左の文語動詞を活用させよ。

見る　見ゆ　聞く　聞ゆ　報ゆ　强ふ
煮る　煮ゆ　干る　干す　植う　飢う
据う　凍ゆ　絶ゆ　堪ふ　率ゐる　亂る
亂す　暗んず　辱うす　偉大なり　撥剌たり

練習六七　左の口語動詞を活用させよ。

見える　聞える　報いる　强ひる　植ゑる

飢ゑる　据ゑる　凍える　絶える　堪へる
用ひる　用ゐる　ぶつつかる　ぶつつける
感違ひする

練習六八　左の動詞は二樣に活用するものである。その何種と何種とにはたらくかを言へ。

進む　退く　恨む　沈む　入る　破る　折る
忍ぶ　死ぬ　開く　立つ　用ゐる　居り

練習六九　次の文語動詞の活用に誤あらば正せ。

爭　はひううええ
敎　へへゆゆるゆれへ
報　ひひふふるふれへ
見　らりるるれれ

別　れれれるるれれ
飢　ええゆゆるゆれえ
堪　へへゆへるへれへ
植　ええゆゆるゆれえ
噂　せせすするすれせ
任　せしせするすれせ
强　いいゆゆるゆれい

練習七〇　左の口語動詞の活用に誤あらば正せ。

在　らりるるれ
閉　ぢぢづるづれぢ
流　れれれるれれれ
射　らりるるれれ

絶　へ　へ　へる　へる　へれ　へ
與　へ　へ　へる　へる　へれ　へ
食　わ　い　う　う　え　え

練習七一　左の動詞を用ゐて短き文を作り、然る後に活用の誤がないかを點檢せよ。

植う　添ふ　敎ふ　ほの見ゆ　うち斷ゆ
堪ふ　射る

【注意】作文を書く時も、始は文法を考へずに自分の思ふままに述べ、筆の走るに任せておいて、後から讀みかへす時に誤字や誤つた語法がないかを檢べよ。さうすれば文も上手になり、自然に文法的の誤もなくなる。

復習三

練習七二　左の文中の動詞を指摘してその何活用の何形なるかを言へ。

一　或ミルクホールの硝子戸に
牛乳
官報
新聞
縱覽
とある。世間には牛乳を覽ると云ふ人が居ると見える。

二　兩國の古店の前にて、子供等凧を揚げながら「こゝの占はあたらぬ。下手な先生やあい。」と惡たいをいふ。占者腹を立てて、「こいつらは毎日店先で邪魔する上に、憎い雜言。うぬらは一體どこの餓鬼共だ。」「あててみな」。

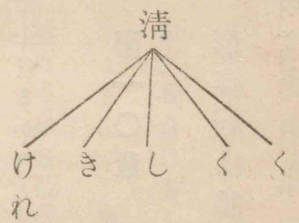
三　江戸は日本一の都會とて珍品奇什こゝに集まれば、書籍も亦求めやすし。されば生活の豊かなるに安んじて、圖書を蒐集し訓詁考證に專らなる學者も少からず。盲人塙保己一は眞淵の門より出づ。幕府に建議して和學講談所を設け、ひろく古書を集めて、群書類從及びその續篇を編したり。

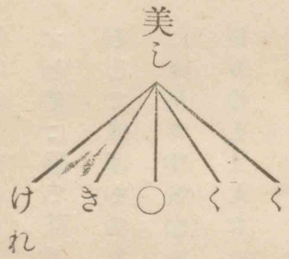
練習七三　左の文に誤あらば正せ。

表の方でジョンがワン〳〵吠へています。暫くすると、ワツといふ泣き聲が聞へました。私は、又かと思いながら表へ走り出て見ますと、案の定、ジョンが近所の子供の著物の裾をくはえて放さないのでした。私が「こら、ジョン」と怒鳴りましたので、ジョンは、メソ〳〵泣きながら歸つて行く。子供と反對の方へ、飛ぶように逃げて行きました。家へはゐると、「又かえ。」と母が問いました。私は、あの犬にも困りますね。」と答えました。二人がこんな話をしている間にもう表からまたジョンの聲が聞へて參りました。私は、「ジョンを裏に鎖で繋ぎましようか。」と母に言いながら、又表へ出ました。そして逃げまはるジョンを捕えて裏につれて行き、鎖で木の根本に縛りつけました。するとジョンはこはごは私の顔を見て尾を振り出しました。私は何だか可愛さうになりましたから、頭を撫でて、「ジョンや、これからおとなしくするんだよ。今日だけは赦して上げるから。」と言いながら、鎖を解きすててやりました。

第一〇章　形容詞の活用及び活用形

【三三】　形容詞は體言の上下について之を形容する語で、やはり用言である。その活用は





水清くば酌みて來よ。

水清く、風涼し。

水清し。

清き流れの水に漱ぐ。

水清ければ魚棲まず。

花美しくば見にゆかむ。

花美しく咲き亂る。

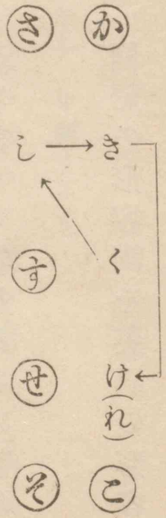
花美し。

美しき花咲けり。

花餘りに美しければ、折りて瓶に挿しぬ。

の例でもわかるやうに動詞の同行に活用するのと違つて、

加・佐二行に跨つてゐる。



そして、その活用形は、未然形と連用形とが同じで、且命令形がない。即ち形容詞は

(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
清	く	く	し	き	けれ	○

とはたらくのである。但し「美し」といふ形容詞の場合でわかるやうに、語根に「し」を含む形容詞は、終止形に於て「美しし」と「し」を重ねないのが普通である。

●形容詞の語根に「み」「げ」「さ」等の接尾語が添ふと名詞になる。（第

便宜上「清し」「堅し」などを**く**活用、「美し」「樂し」などを**しく**活用と名づけて區別することもある。

四章(一〇)參照)

㊃形容詞の連用形は下の用言に連つてその意味を限定する時その儘副詞となる。(第三章六轉成の副詞參照)

㊄隨つて良行變格の動詞「あり」と複合して形容動詞となるのもその形である。(第九章(三〇)參照)

㊅「靜けし」・「露けし」・「さやけし」・「安らけし」のやうな形の形容詞は已然形が用ゐられない。

練習七四　形容詞と動詞との形の上の差異を問ふ。

練習七五　形容詞と形容動詞との形の上の差異を問ふ。

練習七六　國語の形容詞を英語の形容詞に比較して考へよ。

練習七七　左の形容詞を活用させよ。

善し　惡し　白し　黑し　高し　珍し

男らし　甲斐〳〵し

練習七八　左の語の品詞を問ふ。(動詞はその活用の種類を言へ。)

言り　無し　久し　久しかり　騷ぐ

騷がし　正し　正す　正しくす　甘し

甘んず　甘み　涼し　涼しさ

練習七九　左の文中から形容詞を拔出してその活用形を言へ。

一　用意よくばその旨を通ずべし。

二　人生は短く藝術は長し。

三　妄想は人を欺き人を謬ること最も甚だし。

四　口惜しく腹立たしけれど力及ばで止みぬ。

五　喜ばしさ譬へんに物なし。

六　罪なき者は恐れず。恐るゝ者は疚しければなり。

七　遠慮勝ちなる友の何とも言ひ出さぬに、もどかしき心地せらる。

八　手のわるき人の憚らず文書き散らすは宜し。見苦しとて人に書かするはうるさし。

九　腹立たしや、今日は日高くば能登の國まで指さうずると思ひつるに。

一〇　惜しからぬ命なれども今日までにつれなき甲斐の白ねをもみつ。

【三四】　口語では形容詞は

(語根)	未然	連用	終止	連體	已然	命令
清	く	く(う)	い	い	けれ	○
美し	く	く(う)	い	い	けれ	○

とはたらく。即ち、文語の「し」「き」が共に「い」となるのである。(連用形の「く」は「う」にもなる。)だから、未然と連用とが同形である上に、終止と連體との區別がないことになる

●右の活用表でもわかるやうに、語根に「し」を含む形容詞でも、口語では全く變りはない。

練習八〇　形容詞の文語と口語との活用を比較してその異同を檢べよ。

練習八一　練習七七の形容詞の口語活用を記せ。

練習八二　左の口語の形容詞を活用させよ。

澁い　苦しい　固苦しい　尊い　勿體ない　うるさい

練習八三　左の文中から形容詞を拔出してその活用形を言へ。

一　食物の話の出る一座は親しいものだ。
二　ひもじい時にまづいものなし。
三　石が大きければ水煙も夥しい。
四　若い詩人は輕くうなづいた。
五　あたりの靜けさを破つてけたたましい叫び聲が聞えた。
六　おゝ、ひどい雪だ。寒からうが少しの間我慢しておくれ。
七　未だ親しみが薄いけれども、その内には慣れてくるだらう。

八　何だかあぶなつかしくて、まだ決心がつかぬのだ。

練習八四　左の文中に誤あらば正せ。

一　嬉しひ嬉しひ。
二　新年おめでとふございます。
三　雪達磨が黑い目玉をむき出している前を白ひ小犬が驅け廻つている。
四　昨夜は恐しい夢を見た。
五　貧ししと聞きて同情の念を禁じ得ざりき。
六　ただ〳〵それのみが恨めしふございまする。
七　おまへはそんなに口惜しひのか。考えてみればさうもあろふ。しかし、散る花を追う勿れだ。出る月を待とを。
八　兄弟仲よふ庭で遊んでおります。

九　私はほんとに悲しゆうございました。

一〇　人の難儀を救ふのは美くしい詩人の義務である。

第一一章　音　便

【三五】　動詞の連用形から「て」又は「たり」「た」に連る時、その語尾が發音の便宜上他の音に轉ずることがある。これを動詞の音便といひ、原音の假名を轉音に書きかへねばならぬ。動詞の音便には左の四種がある。

【注意】　動詞の音便は四段活用、又は良行變格、奈行變格の時に起る。そして口語では音便の方が普通の形である。（第六章一五二附記參照）

一　い音便　き　ぎ　の音がいに轉ずるもの

い音便

咲きて　咲いて
泳ぎて　泳いで

○が行の動詞の連用形がい音便を起す時の場合は「て」「た」「たり」が濁音になる。

●「指して」が「指いて」となるやうに、語によつて稀に「し」の音も亦い音便を起すことがある。

【注意】　泳ひだ　泳ゐだ　など書き誤らぬやうに注意せよ。

練習八五　左の文中の動詞の音便を指摘して、その原音を示せ。

一　先生がこちらを向いてゐるよ。

二　太祖崩ず。太宗繼いで立つ。

三　腕も折れよと漕いだ。

四　暫く退いて形勢を觀んと欲す。

五　少し痛が薄らいだので床を離れてみた。

練習八六　左の文中に誤あらば訂正して、その理由を述べよ。

一　君の話を聞ひてほんとに驚ひたよ。

二　天に向ひて唾す。

三　天を仰ひで長嘆すること久し。

四　今度背ひたら承知せぬぞ。

五　急ゐで參れ

二　う音便

ひ　の音がうに轉ずるもの

問ひて　問うて

【注意】　問ふて

と書くのは誤であることは活用形の上からも說明が出來る。その理由を考へてみよ。

練習八七　左の文中の動詞の音便を指摘して、その原音を示せ。

一　昨夜買うて來た。

二　冷笑うてゞ居たりける。

三　顏觸れが揃うた。相談を始めよう。

四　母校に舊師を訪うて昔日を偲ぶ。

五　何處かで逢うたことのあるやうな人だ。

練習八八　左の文中の誤を正して、その理由を述べよ。

一　我が軍先を爭ふて競ひ進む

二　掌中の珠を失ふたる心地して茫然たるばかりなり。

三　忽ちに望を失ふて出發を思ひ止まらぬ。

四　望を失うこと勿れ。

五　負ふた子に髮なぶらるゝ暑さ哉。

六　思ふてもみるがよい。

七　さういう事情なら、僕にも少し考がある。

八　粗製にせ物あり。森永のミルクキャラメルと云ふて御求め下さい。

三　撥音便

撥音便　に　び　み　の音が撥音(ん)になるもの

死にて　死んで

飛びて　飛んで

飲みて　飲んで

●右のやうに奈行・ば行・麻行の動詞が撥音便を起す時は「て」・「た」等は濁音になる。

●語によつては「飲うだ」「呼うで」などゝ音便になることもある。狂言の「頼うだ御方」などもその例である。しかし、普通の場合は撥音便になる。

【注意】　死ぬで　飲むで

と書いてはならぬ。是も活用形の上からも説明が出來る。

練習八九　の左文中の動詞の音便を指摘して、その原音を示せ。

一　雨が止んだら出かけよう。

二　噛んで含めるやうに敎へてくれた。

三　死んだ後の事まで細々と言ひ遺して、父はその日の暮方に息

をひきとりました。

四　旅に病んで夢は枯野をかけ廻る。

五　古來古今集・源氏物語などと相並んで行はれしものは徒然草にして、その註釋の書も亦從うて多かりき。

練習九〇　左の文中の誤を正し、且その理由を述べよ。

一　これが所謂飛むで火に入る夏の蟲だ。

二　植木の手入れなどして餘生を樂しむでをります。

三　紳士の姿が森蔭に消えるまで、太郎は後影をふし拜むでゐた。

四　茲につゝしむで哀悼の意を表す。

五　必ずおれを恨むでくれるな。

促音便

四　促音便　ち　ひ　り　の音が促音（つ）になるもの

勝ちて　勝つて

買ひて　買つて

ありて　あつて

●「買ひて」「從ひて」のやうに波行四段活用の場合は、う音便をも促音便をも起すことがある。

練習九一　左の文中の動詞の音便を指摘してその原音を示せ。

一　當つて碎けろ。

二　雲を霞と逃げ去つた。

三　敬つて白す。

四　もう二三日待つたら樣子がわからう。

五　赤が決勝點にはいつたと思つた瞬間に、電光のやうに白が跳り込んだ。

練習九二　左の文中に誤あらば訂正し、○印の箇處には適當の假名を埋めよ。

一　勝て兜の緒を締めよ。

二　俄かに風が吹○て來た。

三　「川岸に沿ふて行けば町へ出られるか。」と問○てみた。

四　立たり坐たり少しもおちつかぬ。

五　鏡のやうに澄○だ水面に木の葉が一つ浮むでゐる。

【三六】　形容詞にも音便がある。い音便とう音便の二種である。そして、口語では音便の方が普通の形である。

（い音便）　悲しき‖哉　悲しい|哉

（う音便）　寒く‖なつた　寒う|なつた

【三七】　又、形容詞の連用形から轉成した副詞が佐行變格の「す」と複合する場合にその語尾の「く」がう音便もしくは撥音便を起すことがある。

（う音便）　全く‖す　全う|す

（撥音便）　安く‖す　安ん|ず

練習九三　次の文中の形容詞を指摘せよ。

一　あゝ面白き眺なる、大和島根の有樣や。

山高うして水清く、松青うして砂白し。

二　數多い史蹟がないとしても、京都は好い郊外を持つた首府である。奈良の舊都と比べると、規模はやゝ小さいけれど、感じの複雜なのは却つて彼に勝つてゐると言つても間違はない。

三　夜は深うして、粟も麥も薄の穗のふうわりとほの白い蒲團

を被いてすや〳〵と寢てゐるので姿も色もぼんやりとするのであらう。

練習九四　左の文中に誤あらば正せ。

一　小成に安むずる勿れ。

二　面白ひ雜誌は面白倶樂部。

三　貴賓の來臨を辱ふす。

四　首尾よふ兄弟が仇祐經を討たと聞ひた時の母の心は如何であつたらう。

五　廣ひ世界だ、悲觀する事はなゐ。

練習九五　左の文中の誤れる方の假名を消せ。

一　ありがとふ存じます。

二　弟達は兎の子みたいに跳んだりはねたりして遊んだ。

三　道嶮しうして全軍甚だ困しむ。

四　謹むで新年を御祝ひ申上げます。

五　大いに意を强ふするに足れり。

六　思ふたほどのことでもないやうだ。

七　僕は幼ひ時の事を思ふと、いつも力松の名が思ひ出される。

八　一見たやすく思はれる事が却つてむづかしうございます。

九　文明人は公德心に富んでをる筈だ。

一〇　任重ふして負擔に堪へず。

【三八】　なほ、名詞にも、音便でいやうやんなどになつたものがある。

つきたち（朔日）　ついたち。

あきびと（商人）　あきうど　あきんど。

【注意】これらは本の語を考へれば「つゐたち」「あきふど」など書くが誤であることがわかるであらう。

復習四

練習九六　左の文中の動詞及び形容詞を指摘して、その活用形を言へ。

あはれ餅よ。喰べて旨く、搗いて音こそ面白けれ。一人にて搗くは淋し。二人なるも三人なるも四人なるも、多勢なるほど勢よくて盛んなり。音頭取りて、ペッタンコ〳〵ペッタンコ、見る間に幾臼も搗かれて、熨されて、四角な白き座蒲團のやうなおいしい餅は、幾枚も出來上りたり。

お供へのいびつなるは福助の頭よりも可笑しく、おかめの女中

圓めやう下手なれども、今宵は叱言いふものもなし。

練習九七　左の文中の誤を指摘して、その理由を述べよ。

いさゝかの登校の疲れを休めやうと芝生の上へごろりと寢る。朝露がしつとりとまだ乾かずにダイヤのように美しふ光つている。汗ばむだ身體には得も言わぬ心地よひ觸覺を與える。

日本新文典 上卷終

附錄　文法上許容ニ關スル事項

一　「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二　「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四　「コトナリ」異ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五　「ヽヽセサス」トイフベキ塲合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　手習サス

周旋サス

賣買サス

六　「ヽヽセラル」トイフベキ塲合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　罪サル
　　評サル
　　解釋サル

七　「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
　　上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八　佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
　　攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九　てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例　花ヲ見ルノ記
　　學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
　　市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇　疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例　有ルヤ
　　面白キヤ
　　父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

二　てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　數百年ヲ經ルトモ
　　如何ニ批評セラルヽトモ
　　强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

三　てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ
　　嘲弄セラルヽト思ヒテ
　　終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ
　　萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

三　語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ

語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

一四　上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

一五　てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)(スレドモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ)(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

一六　「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例　イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

カード二枚入

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セラルルモノハ、德川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ、文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ、之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ、編纂ノ場合ニモ、之ヲ應用セントス。（明治三十八年十二月二日　文部省告示第百五十八號）

大正十年九月十日印刷
大正十年九月十五日發行
大正十年十二月十三日訂正再版發行

日本新文典
定價 上卷金參拾六錢 下卷金參拾六錢

大正十四年度臨時
定價 上卷金六拾五錢 下卷金六拾五錢

不許複製

御撰定用見本

編者 藤村作
編者 島津久基
發行者 佐藤幹枝 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
印刷者 高橋郁 東京市京橋區弓町二十五番地

發行所 至文堂 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地 電話青山三五四六番 振替口座東京二九五〇七番

弊堂發行の教科書は供給差支無き樣常に澤山製本出來準備致居候間若し各地書店に品切れ等にて御差支有之候節は何卒弊堂へ直接御注文被下度直に送本可申上候

(三協印刷株式會社印刷)